諸國風俗問状答　全

越後國

857
131
販技注意機入
類
號
冊　1

国立国会図書館　タイトル『諸国風俗問状答』 請求記号 857-131
ガラス使用

諸國風俗問状答をうつせる序

このつぎ我のくには土の風をしらるはよしあるわざなれどもおよそよろづの事はさきのよし書家をしるしとゞめおかるゝ内外のくさぐさにかゝづらひて筆とる事もせず妻いひ成彩子なる水野氏通称奈良家は我が親族にて同齢なる近きよし心地ありてときどきに隠居の折にあり序を村方此事などをるにあつらひむすぶはを時しもあり序むとてきこえ所其上ざまを補ふ

857-131

唐きて物なにまれて此人にまうさせたのみ此君
まし和学弁書を学ばせぬれとも一とせあまりに
なりぬこも屋代氏の志あつき心にかへりてなん
ありける常に老婆心はあらぬきに慣ひ申し
古の人あらはしける物にて之れよりて此事は
一百へ数を取る手になんなりぬあまたあき
あさいふ事なりしをあつまりより世の中
にてさかりしく成ゆきて四月のころよりかるに
またしに筆立あり五月の十九日まで書志の
城も前に上方の勢をそうして津

あまりそて日を遠近のたくひやむ時なくこから
わかりゆきてもえらびことにかりぬ十二の月
十日より老きさきはかりに病もと
ありておもせるやまひの頃此意のあまたち
遠ぬるおもひしなんどをやうしに顧ぬそや
この書よりつかることくさくへ思ひまし書
はかるせは文やまりぬるに古人のいくされ
うちに婦女つくりものかつつ或は鞭をよこ
たへて詩を賦し歌を志て筆の秘曲を
後へ下るとくさく後の世につたふ

いとたかきときさへしらんしやハものゝび
なれぬとかとよう雑書の癖ありていとあるる
わくハものなんとて文字とする所なある
あるう遠江人ハ一里二里のうへ遠きハ十町
五六丁によまも名をお会了筒書かどをきずれて
暁ぬとて福島稲荷京下筒居亀見なの
村と兵燹までもゆるひてわく村さとも
いつ焼しはとあるへしもけうりてそのうへ
宛の味よありしの文もうなれきされとおの

大蛇の　又大蛇居てかゝ

くせぞさりさりやちびる筆とりてかうたち
なれどをかしきつゝるをひとつ招しく
あはつきも後にくん人ハ相もならいさく
こ読さんとこそさらしさま

文政にとせ卯月すゑの二日
かつらの津の村岳
鈴木穂積忠穂謹撰

いとたふときをしへなりしかハものゝび
なりねとかとよう雑書の癖ありていと多かる
わらハものゝなくもがなとするにたぐる
あまり遠き丈ハ一里二里のほど近きハ十町
ばかり鉄炮の音播てふまで稽きこえれて
よもやと会下前番おどろしくなる
暁にて福嶋稲葉なと下前番能登の
村し兵発までもゆるなりてわり村さとも
いつ焼ぬらんもはかりて そのうちへ
病の味わあり何の支もうち払きたれとおみ乃

くせぞさりてや ちびる筆とりてたてら
なれてにどもおほくとつゞりをひとつゐしく
おしつゝも後にこん人ハ拙もなかりけらく
こゝろしさへとそさとしたまへ

安永八とせ みな月すゑの二日
かつしか津の村盛
鈴木穂忠穂後義順

風俗のこと士家ハ小笠原流の礼法を用ふ省略ハ其身の
分によりさま〴〵なりされは土風といふことわけて侍りは農商の類ハ
山村水辺のかはり或ハ東西遠近の隔ありてなかなか一概にす
責め申すまじく面々さまとれかゆるのことを許し侍りぬ

正月元日門松の事

去月なかばあまりに枝松村といふ山里より例年の定例
とて百姓とも家中諸士の屋敷へ松の枝又儀木を持来る
是を掲き遠きさの軒の下などにたくはへおく持来りし
ものに米并或ハ白帯などあたへ酒飲ませて返しも
門松の飾なれは江戸のこと異ならず先門より左右二間が
ほどと押出し大竹又ハ杉の丸木を立て鳥居形に柱をたて
其に注連を懸け侍り松竹ゆづり葉の外他家他事と
侍る事侍れ共栗の木を付る家は何のわけとはしらず
如く侍れ注連の其中に幣切かけ其上に豆から

炭鍋昆布串柿等を結ぶ左右の柱松竹の茂こゝに
葉あて椀の形を作り是を門神の御器と名付これに
雑煮汲菜饌などを供るいつとても雪の深きに此日は
わけて道作りし松立深しす朝日の色さく殊爾等さ倍
白かの世界と疑ハまし是のみぞ雪国の栄とや申べき
領内之寺院神職あるは里の長などの外ニ松飾と
いふ事ハ侍らず

蘇民将来の札ハ年の内に神職の許より給りて
たらしの木をもて長さ四寸五分ほど方の幅五分ほどに切り
上下に糸を通し紙にて男ハ白く女子ハ五色の紙を
下に付蘇民将来之子孫也と書上の糸をわなの衣乃
脊縫の通りに縫付て着せ侍り又紙の札に蘇民将来
子孫也門戸也と書て門戸に帖するも侍り
此日除夜より歳を守りて鶏と晨告まへ年男恵方に
むかひ若水を汲て垢離をとり火をうつし祝とて豆煮を

焚き湯をわかし主人方を浄め潔して麻上下を着第一
大神宮を拝し次に城の方を拝し次に祖先を拝ま
其余信仰の神仏を拝するも心々に侍り家業の為には
大よそかくのごとし民間にありてハ鋤鍬の類守屋の
仏神へ清く捧げ物して一年の豊栄を祈るもあり
又家業の志願などあるものハ年とて跳まいて
穢ありといふも行ひとぞ此社参満ちまさるは家内喪服の
言語を絶し婦人ハ国よりいでず社参のことなし又は
ふかしに逆ひ入ぬくてのち世並の祝をなす是ハ片山里の
風にて一様には侍らん

婚儀の事

士家の礼法異なるを侍れ民家にて家ごとに一偏の
儀をまうけ而て飯とくわきまへなし口まかせ若此
ルによりまうせ申さきいふもしくも侍り是を其家を行へ
等へ侍り人に給るハ形をなしく比角にきりて三枚七枚

はる八七夜を萩竹豆売なとまてをはやうつせとわりまて
まて始るをもとえたねあつるとりて年賀の人来ぬまては
菓物なりとも喰積を出して祝ときれも其の菓を備に
かへてこぬ人にも取し紀にも始るなとにてもいふすや
此備を民家まてハ刀備と云ふ候

屠蘇の事

年の始に医家より始まるを赤き絹の袋に入れ陰庭
より井水に(?)ひたし置き其の袋を元日にて(?)陰の刀
酒にうつす是を祝したる物を飲めて年中の邪気を
はらふとて酒にいれて祝ひ家々すゝむや少年不測
屠蘇杯と杜詩にも人のあまきはかの家より飲みの次第(?)
にて若長に始る我例には為候　されと年賀の
礼物とのミして長老にまいり勧むるも田舎にあり
有ることそ

組重の事

杯の子田作りたゝき牛蒡　煮豆等通例にて外海老
干大根豆腐蒟蒻牛蒡(?)鯡の塩引串貝なと用ることまゝ
候ゆる萩を煮染く出ものを通例と申ことに候、是れ笑を
よふに言葉のいはれハ目出度ことに用てよろこふなりとて
かくし侍るとぞ

雑煮備の事

萩田作りて全く(?)焼豆腐蒟蒻胡蘿蔔昆布なと
雑人形すまる(?)鯡の塩引いろいろ入れて子ともへ参る
膳の向に鰯なますを香の物をも松に(?)ものを侍るも
田舎まて侍り

年徳神の棚の事

年と祈を定めてあるも侍り　又正月を(?)しよし板にて
つくり来て正年の恵方に飾りてあるも侍り多くハ
割木を十二本閏月ある年ハ十三本縄を添　葉菓縄
まくあしらへ明の方に飾り飾ハ大かた松かざり注連なとへ

幣切さげ候を門松にかざらし神酒福手餅外に塩鮭一尾
又ハ鰯なと添へて棚にかけ備へ飾り御明しあげて
主人拝をなす事常なり農家にて是等を門の
柱とし松たてて注連引きて飾るもあり唯農家を枝
俵にて米を刺ぎ立て飾る又棚を帯を飾りて年始
神ハ朔日の日にあり飾ると伝ふ伊勢ちて元日の日
ならハ上は縁に草引とて此日ハ大晦日へしとて
よろこひ十二日卯の日に行はれ此日以後へ
とて然しと田舎にて以ふ所へり但し正月ハ行はれ

恵方祭の事

いつも畑を掘りこれハ幡飾り宿秋葉諸神を一十五日
伴て有り木ますふつ田舎とそれし所の謂る文を
作んの伴へまうつる村も有り根に作り

保花の事

士家なとにて士農工商の家に何の吉祥をとしいてれたく

同じ屋敷内にて十五日農家にて八十三日十四日の日に小保
として是なれハ稲作り是ハ元日より十五日まで此ち正月と
唱へ十五日より是ハ十七日を小正月と唱へ備り小正月の保
といふ屋敷中賑して小保といふ取り餅など唱ふ
うちに若もちを作りて其の仏に廿日餅を飾りて
小餅以上をた大豆の粉を是を保を作り飾り
まゆ玉を作りて稲を保をとめてさらめし作り是を稲穂と名付
枝なる木の枝を枝ニ飾る木の枝につけ出し
こゝの保花ハ豊年を祈る印そとて枝につくる
此田植といふ是年の稲作をおこして
いひ保作りハ女の子おもしろて早乙女とらひ作り
始まりて植まてしといふ是等の万の花を飾り付
かくて其の作に稲の穂として竹枝を挿して作くり
保を飾る稲の形に葉をつけて飾り稲穂に
いふそれの作りなりて其のうちに保を正月に飾る

国立国会図書館　タイトル『諸国風俗問状答』　請求記号 857-131
ガラス使用

ましくなきを云ふ年ハ風雅なる花籠なとして結ひ作りて梅
き若菜を二三人持侍りなしその中に蕪餅を板の
めく作りて是を粟穂といふ又去年の飾餅をとり
たる折の木を切めおき飾の中に如し餅を河
けて是を本飾とよぶ十五日の朝かしきまてハ備
ふ此国の為物の形しる若葉餅なと多く飾りさせまきハ
しく有るのミ

破魔弓羽子板

破魔弓といふもの在て破魔弓師なと作りでハなし
羽子板ハ表に京雛の形を絵かき裏に松竹なと見るあり
形よきを残年の若木に羽二の子添て女子もなくん
方にて飾る年頭主は児女子に取らせて嫁の家々
祝ひ侍り

子供遊びの事

於年中双六の何う十二月をさしおりさやうの遊びし
侍りる也延享の始めて百とに八流行傍されたる
三本の鮮すこし雪の積る事三尺八ふ去と七
八十人ハ深しとしる三七人ハ常の事なり雪の積りて
一面になりぬるに京此男児雪陣といふなすし
作りき川なかの之屋との雪遊ひするなして体場と
とりたる場の中に兒十二三歳なかりのこともかし歎
味方の鮮となかり雪投の体をとたて雪を
投りてことなし鉄矢を投しは立に投ありて者
ふくして終分かにとなれを場とつ其人勝
を組ちを役はせあとは其方の脉し若我の術まて
見るに目なをしん教をあり揚るさ時思ひ歓宝に
ひとこれをかりて侍いて凡そありたい雪かり早下とを
いかなかれは勝我をしまる作くれのみ体形とて作
るかに門櫓塀塔築山なとしく鮮作る事いふさせ

国立国会図書館　　タイトル『諸国風俗問状答』　請求記号 857-131
ガラス使用

かりそめしかゝる故に迷ひを遂国までいかゞや侍らん
今日一年のはじめを祝ましけるの儀
仰きもせし侍られ　神職諸宗の寺々にて国家安
全武運長久五穀豊穣を祈る事なるほど日本
の事にて毎年怠らず勤し　浄土真宗にて八祖師
のまゝに文殊朝をに讀て教とし　真宗の習
法と同しき由おりされとも
曾聞るよし神の道を祈(む)とし給ひしとも
御門にかへて吉きは年中祈る事ゝ正月元日に読
法の事祈りとて寺々にて申す事にて是をよ
十六日に繙(ヒモトキ)とて祝ひし是をよむかのこともかくもれ
小名おしびて早起これをよろこぶとかゝん

二日掃初の事
城内の掃初二日なれど家中には箒を用(ふ)ふ式ある
を紀飛ばして田舎にて侍られ民間にては掃初

ともかく寺々侍らん　家敷の掃除を前の日より始
め掃初と唱ふるも侍りけり　去年も読始讀
始等し侍り　商家にては前日とて未明より戸を明き
物買ふ人に祝ひ物おくれ物かふ人も初(買)とて南都事始し
豊作は家々にて侍る始とて嘆きて絶え　島民酒柳を送り
引き神酒を奉り参詣おもふ人も多く　あり夜中
より起て参りつむつきし侍り

十一日蔵ひらき
謡初　二日の夜し侍り田舎にては師匠などよ
りて町のきやり音頭にて謡ひ初めといふ
侍り

門松とりの事
家中にては七日の朝とり侍り　田舎にては十五日十六日まで
とり侍り　門松は二本の神々のむかへなどにて侍り　正月十五日
の朝　書初粥を炊くにも用ゐて侍るとぞ

六

吉書始諸事始之條

吉書始讀書始商始なと二日の儀なり祝し侍り武家にて
の始ハ年始年中の御吉例にて御退出より侍り
其のうちの射始馬始なとハ猶も武禮事
省く事なし是ハ農家の傳也諸事始りを侍れハ也
農具の作り始も又暦の吉日を用ゐるよしなり此經
浦牧との事始又凡し諸事始なりと云ふ詐し侍る歟

親族往來の條

居祝並糧喰積親族其外是等の往返侍り板級と
ゆゑのゆゑハいかにも其返しとも是をさしも侍れ

七日七種粥

七日七種の粥ハ此七種の羹ども其外ハ御あいかし
そして祝ひ侍り此の屠蘇の鳥と呼ハ取りし事なれ
あく祝ふ事侍りし

十一日藏ひらきの事

具足の祝ひ是より始まりし侍りとて神前の餝りもち
くさ鏡を開き侍り農民ハ田の字の家にて祝ひ祝儀
事ハ十一日と定まりし其へ侍り

藏ひらきの事

藏ひらきハ正月十一日を用ゐ侍り士家ハ祝ひ
として其年に侍りしも侍ふらん商家ニて十一日を
しるしとなれハ其のよりて其を開て祝ひて
祝ひ内そのうち大黒柱のもとに神酒を供し
餝り并其上に道具を飾り並に是より始め
侍りしハ是を侍りて神酒をいたゞき頃
おとこ彼の子とも即ちよりつどひて是を以て
其年事とてつけが祝ひて侍り并に嫁
諸餅と其酒を以して以ふなり農家にて
酒のとめくもす其者ハ如何なれ神とする事を

用ふるよしにて一名おんだはしといへる也春の始めの祝
ひとつきにて三川儀ともいふことにて始むるの
ありとて又の祝ひの事を始まりて四月を表し
はやしを奏楽まで耕すのまあるも儀ふるの祝
持ちわたまかて形ばかりにいたしまき初として十月
の夜此の子此刻よりたれころより出入こしのとのあり
まり出て苗あとゝしち欅引縄張さしを松かし
網てきの三座其のせ掛小白鳥を盛りて中に
至夜の始めまで年まても床に飾るさて夜
明ては祝ひ代り取川道の祝ひ持ちて皆祝ひき
ひとて祝のもの小みきそれへおろしと飲て家に
帰りきたし紀めを清として酒のかけ祝の引縄
を敷きしたひいたれをとりて宮松引る燕
此頃あるの又の祈年の形あると作りて飾るると
ゝ候ふとて又田打初とて苗代ちう田小宮とて

七五三をかけ御神酒をたてゝ形小幣を立て餅をさゝる代を立て
始るも作り
十四日道祖神(サイノカミ)あるの事是たまは長の事
男子二歳といふ正月十四日小京あるの形しるる男
神めて神のゆくと勝年(ヌル)木(デ)とて作りたる形にかけ
て寂(ツク)蓋し作らきたるをさせ様あるの蓋小いそ
まへのれのここかつらせまへつきて掛のなと任せあ
宮あるをも神して祝殺の宗子小かき、作らしの道
祖神ありといつて言子を純粟年稀ヌ保父
神酒神として純米をもて作し出して作り松の
二ありて酒のまゝしめて帰りそそとされの神の
勧進といふ米わりよりたる家の内の方小香まで七八
町もあり子内の床さしるる小宮を作り是をとさい
の神堂といふ是小向て門をかかさ七等この
きより五色の幣帛をさけよみこみとらぬ開きて待らし

△分と肩そけ中にさい
□夷の神のしとえ三おても丞をもおとやれ

□近達傳をとせけて是と書名乃の御料とんを

是を扇車といふ十五日とあれハ堂の内 神々とも並し
御酒備へ祝ひ侍らぬ事し祭れ侍り加らぬるとし
一年を今年七年つ在ある是れ神のうくいハ昔を焼
とほしく満てと通しくとは流し侍りよりて左義
長の形ハ十文字に祝ふ付そ三毬打や左義長といふなり
そその心をそうぶる扇のふそいふて柄子そと出るりけ
柄あとおそ是り侍り△氏おハ近江より十二三才かりのもの七夕
乃り比人分祭の盛道畫藝の神として紙子布服のとをの
いさし京中へと□入丁娘てもかいりやさし半中舞の名
にようても色こそもこそとれハいぬるのさとくろふわ
くゆしにさてつくられ ふいれとおしやれとにく
みとるへふ稀と云ふ御年物とまてこしてわさへあふれ
門松の松竹たてり□菜あさ清異なるも侍りれ村く家
齋をとこうふ持ゆきて書て 清さかけことまれ
竹たてめかるし那と積々そう嬢くる氏てたいまきしとまる

まてあり新年てふ所まてハ松竹してて子供のとの
これまるに鏑矢と大とのあれハうちくへのちかふ
松とあて川ミの五色の絲とてかけられる御幣をと
振て着況の句を唱ふ事とまちのおしめとつて
二尺とつて清くぬつてたてをしのとつふて御酒のよ
すわ一日にてなるとかけてりイトリかてはやささ一角
ゑにも名なりこれの正月のなのひよゐとつてし
ていしこさかしるもてうしたるもにし御縁か侍
らふ是より日本の事しそうくべしとつけてどうと
つめこえよりまろてされのまくめ子らて深るあり
並あり一雅て信い思つあの方くかし涌しこされの
作事との事さなりひそて七約まてしハれうて深たえ
やしや深清くらこの大此かし
さいの神のさん古ハ云ふ事子み膳てしを通りの世翻
を左右ろうけ左義長といふ顔をもあさら蛇の目

国立国会図書館　タイトル『諸国風俗問状答』 請求記号 857-131
ガラス使用

といふてかざることのさかく、まことに是非此繩をとり
ていはゐありやいでもまいでと申す青竹のさき
あまへ分ちて竹根本まで末まで其を結て
青竹のうらまでも分ちて竹根本より川松
注連縄を掛けし種々なる飾りおさしとて
之やうは昔しのへ形を結くり又は幣もてのし
之を飾りやらぬは結くりおてむかしよりかくするなり
ぬ十五日の後は、まうへ川へ流すなり 左義長
をもとでしめらぬ是を焼 れり中に白粉節を焼くてもや

左詞
一ござちよに二ぎちよに、こぎちよよ、はござちよよ、あくのちく
の槐のの葉とい称んとき此ぞ はりまはおちや
しやりじけのちりやおろやちやらりくらや。
此なんてるらしいくるしましりくことして荷そる。
はやる婦きとあさむる此男

△ほのあるゝ字

とかりてはやされとり小竹のさきにはさみをとまる川の
卯杖ありしよまりて、よろこび此ことに一囲の
ほかと此ふてみ見もいはなり手かくふるは何ものの方
の試筆をけ出まて焼きてくもえあかる此中して
よろこび依けまて係をさやさき、昔しは子供のまて名相
あるは婦女をととめ松の節のやけるは白粉やけの素
ともり御衣いはる青竹の根もとるるの着地をは
これは件一統わることて

削掛の事
是も前年今と削掛の御十五日ほどりけ廿日まで
作り民家にもおかくさく作り

すみもの事
正月七日より十四日の小係にて係花の形より
まこと大きき鬆卯の婦とさしすかりやして新しきさ

菜だてふものゝうちに食もしくは羹ものをすら給ひ
して祝ひ侍る事ぞ皆も知りて侍りつるものゝ木の枝
をけづるも侍り係花をもしけるをもかくして
すぐ山に出て伐つて侍りめでたく候へん
侍り夕つくへ祝ひといふ事侍り家来各々儀式を
とゝのひ且つ斧(?)なとしけちち各々菜をも挿して
この外そのまゝ他の門を出る各々なつふらかきまいかと
いへとも各々ゆふら中すたとしいひつふ菜あまた出刀
斧してかうしてもつつ又各々ふく(?)ぬとあまたのやと
かくといつも各々枝挑の田畑をさしいふにもつる
聞くに出るかしさる事家宰に出でおかし是亦之風か
なりて十五日にかし侍り

十五日小豆粥の事

皆在家にて元日(?)の式(?)とて赤小豆新粥を
祝ひ侍りかゆを煮る時竹筒に小麦の筒を作(?)

切りて言葉にて刈さし早稲中稲晩稲大豆麦粟稗
ならんそれ/\筒に名を付かゆとひとつに煮へこれを
筒のうちへ粥の多く入るを見てその年の作
ことのよし悪しを知る作り粥の中に豆の形分ける
儀式とつけくをうしくはる田植には家の附
ものよりより起して鉤ひ田に出ずるかゆのとくまで
これハこの時まかりて稲の〆し田ごとまゐるとて
田ゆなをる儀に豆の粥を付枝にのせて田男
稲をはそとと若田の稲をすゑかし初と例て
とりて今ふ是を中宿といふこれは中宿に入るくく
かくはるゝ又そ飯も粥一すゝいをとるとの八湯一て
のこゝ祝くにはて物の始ると祝て行くずハ
の飯法くかの古にさゝぬまし為にとて喰ふ
ての日わ果作りに半粥かとくかし別りしるとこれハ
こゝし八色てりして田中やわらしぬ為をさとらひすゝ

口 粥を湯に炊き のむ是は田れの 豆並ニ年しゆ 為にかなそ

国立国会図書館 タイトル『諸国風俗問状答』 請求記号 857-131
ガラス使用

あかきものかけさせて四方をかりありなんといふも有なり
なからむかしよりかくいひ伝へ侍りなれは違返とせず
事と侍り

大のこんこう此事

卯杖卯槌なとの類

大のこんこう卯杖卯槌ともにありし穂垂木といふを
の作り柳ならは勝の木にまて三寸四五寸ばかり
にさらもてまより紙なと結ひさやうの中へ割り
くけよ下に宝畫しを画くしるしとて十五つの毬
玉しいづらもえぐりさへもちて杖のよことけなとけ
大の男十六人へ嫁の尻をうちといひて新婦の
腰をうつなりかくすれは子を孕むといひて
新婦の腰をうつ也かくすれは子を生
むといふといひ伝へ侍り是成婚たるへき様と

いふ用ゐる事にてありしいふ古への御杖の遺風也
豊年の祝して穂たる木といふ事と見えて割り
粥かきよりその形のことを二股に造り男女の類
を画き窓のより飾り是を窓の前てらふは是も
や後世まて通ひ侍らんかし

△すべて穂垂木といふハ春のたなへるなんいはひへ成んことといふ

若餅

あくる日は餅をつくまへ十六日に福を祝ひ
まて餅花にする玉を分侍り

十六日祭りの事

然るに有年々に祓法なり民家にて精進十六日正五九の
精霊祭りて數数を祭るなり

古き東家の事

嘉吉詠を十月に作りいひ此の月に祭りし嘉吉とて

祭るものはなけれとも掃除あり

廿日若菜の義

毎年しらぬ事なれとも農家の祝ふ事にて、座敷
退の頃に作られ物といひの頃つまて座頭法師（メクラ）
長絹（チヤウケン）を着し平家を語り初心者へ見せ（ト）けんと大鼓
いとの笑ふ事をいひて門ごとに酒肴を出して
法要とて三人目出たき事をつく橋の面白
く唄ひて門に入り祝ふ是を若菜と云ふ見る人
々まちの色を尽し手拍子相ともおもしろき事
また鼓を打ちまちの声とて多く目出たく
いつけしてまた是をまた云ふ事に来
祝といふものも作り家中へ十までを取りて
入らしめて民皆へ其の中まで此頃行ひ来ぞ

廿日神事の事

廿一日神事の事に付年中かわり行事社にも作りしと
習ひたる事ありの神事なし

廿日待事の事

大方法然上人の御忌とて浄土宗の寺々にて法
会いとなみ一と浄土宗にてば忌日とて十日に詣
より家々にも法会をなし祖先のためにも法事する
のことあり

此日を以てこのむる事作られ

二月

朔日

此日農家にて年中掃除にこれありまちに弟子来る
来ぬ家は供えて今とふ事ともなし早めにとりふみ年
新嫁の形を飾り二人の子を飾る所といふ飾り（イエ）
作られなとし七日を飾りて其を送るといふ迄

風かや

八日ゝ始のゝり

けうる始とて毒ふ宜く悪魔を消し神佛に供

し若き娘子に針をはけて筥などにかざしおく

く是ハいにしへ武甕槌命魔鬼を征伏しおふ

十二月八日に事始り十二月八日に事終る

其世の人数に矢を入て奉りしとぞ今に針をさ

す人其の皆祓ひにて疫神をやらふことなりといふ

おもけとて宮まゐりす傳へに似しほんちん女房

古猿なりとも味噌多くして蒟蒻に煎るなり土器に盛り

蒟蒻と菜を盛り蒟蒻し菜をとてば先に針を並べ串にさして

きあわしおひしく其より刀をれいそ折れる従兄弟

も是をいとこ煮といふおかしき物なり作りきたりとて

當年なりて祭りす似たる事を思ひ出すここし

作り始

初午

新これ諸寺院寺家ともにて御祭のさ満宮にて年

有る事なしまして中などもみるなり此日書

て手納し前の夜より古歌抔を書ていと綴かし

初午はさきに年ごと火危しとて人ごとに懐中に奥書延寿年

を火の災なしとて臥にみ猶をわく我家にて終り

より夏の始めてのこりに當りしハ御年にてことに年

火災あらしなりより十日まであれハはる年にて焼

亡し十一十二なにて御作しにて災あらしと此年八火に

焼ける者かくいふとなんへ作り諸国すゝめやら待

ふしん出生にて壁をぬるにはるときに作り集める

よしありて見るのもちかしそれは正月節分まで

天満宮をゆかりなる門生集りて是初て納め社

酒たうべ酒宴して祝ふ事八足をと申事とし
侍り

彼岸

諸宗の寺々にて其のこゝろ説法あり参詣群
集す初中後の日も男女老若いと多くあゆみをはこび
侍るをもるゝ者侍りことさら中日は日の入る
くさそて浮ちの東門に向ひてとて念仏唱ひあ
ひし拝たれしゝる人も多くみとあへる事侍り

十五日涅槃会の事

寺々にて浮ちさき宗の外涅槃像をかけ供物
多く法会読経は常のことし其余僧あまたあつ
まひ拾ひて 二蓋のまゝし入ひまする人もと侍り

拝るゝは四の平天下泰平を中上秋の社日まいり人に勝を擬く

又五穀の飯とて大豆小豆粟など加へて飯に炊きて
佛に供する里も侍り

社日

皆アとまて鎮守の社にまうでて豊年を祈る事例し
植る田畑も豊作ならしめ給へと祈て田の神社にまうづる俗
を捧く拝む事田の神をまつり祭るともいひ
侍ふみ五穀の種を持えていひての祝とて捧る
人もくさぐさ六ありしともに供へ侍り

仏涅槃の事

九日山寺にても涅槃の会ありて六日本堂安置の
禅宗々にまでも画像をかけ祭礼する後も
日も同じさまとすへ侍り

皆佛事後二月会といふ事

国立国会図書館　タイトル『諸国風俗問状答』 請求記号 857-131　ガラス使用

四五月中比より二月まてに来る是を赤味噌と云

節季なし
此月を始て用ひ来る普月いたさる事
二條とも承なし
古き事いふも蘆穂の味噌なる事しハ二三年三年ありても
用ひ候を割不用に糸参別して用ひしく江戸にて三月ならハ
是あるよしゆ有ひ侍りよて今の味噌と云は極月
寒の内に寒く味噌を作りて家僕とも古き法を以て
據くは極子をとりうることを以て
古法の遊り様さらにやうられず所読の世ゟ流と来
る同本る所や是の四器本四斗と八合ハ四升有不者有が
有り其の上の営みかの飯の知るは是に對する
如することなりしと載せず其業と此のことの手にて

すべ羽もまこいふしゝぬりおく此し今之体
下のことよくぶれ田舎すこし行かはりてく同じ所にあらう
ありといふ所範設なとく謡の歌さと示さるふ
く酒候かりすとそ

三月

三日おかしの事
草の餅をよまさいを用る古来節よりさくら
雪の将さきしは桃の花を時とくし祝ある事いつの
年も同しよくて作り草餅の用ゐ花と用る
男女子ゟ母緒を寿ある祝前をとうけし来す
皆年い事
なくすりの以侍てず

菖蒲ちまきハつくり

農家にて古来田植の前二季にあるより二十日ほど

りに稀なると云ふ事なく毎年井ると掃除[よく]いたし

とはちいさき俵にして祝ふし菖代田に蒔く

廿日稲の苗を蒔とて草の餅を食す并の宅

と云ふを祝ふとてみなのものとてさしあげ

はけつる初を取りつけ餝りて稲束白米とし

神前佛前へ供し親類へ贈りとつかるを食し

すとて種物にともなふ

此月祭り

新潟にも秋の祭礼に六月十九日諸寺白

山権現の祭礼より夜中もあり明かし以中

の商人職人業を休みて遊ぶ歴々さ所と

夜話と餝りて云ふ事なしつ祝ひ事申すなれば

みきやうあり

此月を称して閏年には此月をたのみ毎年

此月花の節とて婚姻を以て祝ひ事する

少なき候ふれ

四月

新ぱ祭く

廿日節めきとて祝ふ家々ものとてなし候ふる

候ふれ

八日佛生会

花の堂とて四所の花を摘て棚にしつらひ

花とて四阿(あづまや)の形を作りて誕生仏を

を用ひ其餘の家の祈ハ如渇なて同じと如ナ一つを
下さも如何申す事なりとて紙に書きし物して
何ぶひなとし侍り又ハ如何とも申すにて
卯月八日此寺をも帰依きりさら住乃有りうを
は春日祭さ新をといひ侍へ侍り

十一月神事

六月七日より始る山城にまり法楽の神事の始り
于時寺中の祭りなりて下に候べし
十一月より十日十四日の時まで何所も大神宮御衣
あふとて家中の婦女女工をとらへ陸路を流
けす侍へいふ時り舞州ままて此ら繼作ま
を神職の婦女十二日より当しろみりむ
むさ識神し候ま後まて陸る小日本西中の

洗米の余ほりまりて居しくさとあり其許る
家中のさ有り是も本国の席卯まや流をいりく
侍らん

五月

五月の節句の事

家中の外武芸の氣節る事侍ら也城下の所
まてハ男子のある子七つ歳より門しくに加わり
すまら春なく立てる事し武者絵をも出し
ていとみ侍り紙月とあれさ家中より武徒
然にて家法道く立ちまて町中を立てる
端るゐとも幟見せとしはりたるあまりて候ハ
し新のつりよりも成菖蒲をゆくにおいて諸木
同じく添へし今日は粽笹餅なと結ぶ

し続は作り菰を用ひすゝき笹を用作り花
長ゆえさしはさみしかいとて山のいしも垣之下
おしてかけ又々子の遊とそしとくさに広く遊
はいとよろしとて二三日刈みけさの家にある
とうろうせ八家やけの果る引とてわらさ
をとしるて子むしとあ由え飾まなと家
をあるる作り又子の家に生とて来るとて
枕りとり飾の子を有て又二三本のを水に
蔵し吾あて総庭を梅ふ秘結ありて
いし作ふ
五六十年さかり前ゟまて男女小児より
女のりをましこさりことゝりとてせし之ニて

さ侍紙にして蝶の形を作りおくあかりて名をとり
菖蒲を細くたちて尾のめくしかくるもさけ是
と髪に結ひつけきとのは手神の振ヱてを黒
色ふし此との掛似を太くし女ほけに涂食き
袖口をとゝめあり是をたんことしふさして小弁にて
奉きことまき紙にしてせ紙とて本末若に紙
の如さを以足を立るのるふとくえまるくる為
てこそくりてやらやまし寸つ云府うる由にとしくかたのん
寸アカリんと云つよりしとてんでにくらひて其紙
三三ろうニ足添く來くふ踏へ引きそとしる是に
女子供の遊ひあり男ぬ子女こ菖蒲を束ね
縄ぶさむ此苗まて株中の椽を去といひ
供のことさりこぶとり菖蒲打今ハなくしまて

△そ是れかの ぬきさりしそ 地で打に為 のさきと遊と

天赦日

口
そむかし比
松にて花をある
あまたハ有里
早し 冬至

しるし侍りぬ

皆田植の條

山村の地ハ雪消の遅速によりて大かたひとつならずされ
共其年の前後十日ばかりのたかひ有暦の吉日を見
ふして植し先寛年の日をもしこ子ず甲の日天
火十しまたは甲子の稼の為支干の物あるもの
日をいふ吉日とて子午の日を始むるをも
又これあるハ初卯の日を始め植り吉稲先の田植
あるとて田にかゝるまで成せず其のあるらさを雨
降るまでかゝる時は近くのそこの打得とて
植ゑをかせる家の植を窮ては大かた雨露
るしに作るの田植に先立て田の神をうつし

きをそへてかゝへて男も女も襷かけて紙笠あり
新らしくすべを田植数多くそめ着ものは
皆清めかけ服いけ一色出しそれにかて植
る男と女とて男も女も揃得すて後をいゝさき
出たる田をさとしいひしや初田植とて子
稲植る時苗の花を田の神に手をかゝげて
こゝへ又田の神に頼みて着の服を称する
ハ有る手を田に結び植の糸を束のまの葉取と
をかけて非の時にまゐり苗掘服かへして
祝ふ足をさすのありしといふ又さ子苗
植の時諺ありといふやはんこの祝ひ服を着て
交てかしきる足の形をはりかへし稲を取肥かし
るの先足の形を無しからしよ稲て豆を植のあく
ゆとりもれをしとふての苗をさとしをうた又このまゝ足を
流るる所を用ゐて先足は田のものの乾くを嫌ふ

国立国会図書館　タイトル『諸国風俗問状答』　請求記号 857-131

ガラス使用

といふ田植前にはかゝしとてかけ置ては
ひるひるかまつりしなりといふ鶴も聴てけ優る
いまもむかしにかはらずといふことを
菊もしかよ参りは山路にかくこえし谷の
御道鶴にかしこてありみせは何こせり前ろ
其外のこゝせの郷の志てつく所そまうでて参らは
面を海ありて清水は松てらし
ろう重にほせりし鶴は清めしところ二ツみちかゝる
との八重の清しさらさらの流をあをは
てらし名もと名て秋名も名て此御代のぬかのちゞ
みそよかえちふかの川のあめまさら流たれ呉ふ
の日の田うし此鶴をしとかめ今はたえんぐさし
さかあまたく休まとしからし川

此月こかひの事

祇園の神輿渡御神として出る六月中の午の日遊行の行

をわたしてたゞその事多き豊饒を祈し神をまつり
諸家も六月八所の神を祀る因て六月も御饌として饌を捧く
附祥齋中にて祇園の神天より降らせ給ふとの事ある
故を修し家内も皆六月中の午の日御本社の
祇園に詣りて祈る者もゝ事饌を備し侍り

六月神事祭事

諸社より侍月侍ねり守護の札を家々に配る毎日當
宮の宮の祭なり

此月を暑さ閏にみいそはらへなり

ともがら

六月

節句

衣脱といふ儀を穢き赤服を着て節り地の衣を
ぬぐひて常に仕事をいたし侍りぬれば葉の枝ハ
地脱はさえ見ることも侍りといふ

十二月家祥

此儀ハ侍らぬ

大晦日につきたる行事

親族たがひに互に歳暮を訪ひあふ武士書に精衣服凡
入のかゞみとなるべし因ぶれて土相用ひる初丑の日
に詣たる古祝を今年は人を殺すといひ当支
にかゝさぬを合ひ一ともに発す事なし を行ふといひ侍
ふ

納涼につきたる風俗

かしこまりたるなし侍らぬ

氷を納むる事といふ

此事なし

嘶の事

神社にて穢のおそれて賀茂にある行事此夜侍らん
正月ある事ハいつもを用ふ
月の初めを祝ふには初月を前に鏡を祝ふ

正月を用う

付時に雨乞又は降つゞきたる時晴を祈る行事

雨乞のさたつやうなれ神人御旅所神社の前
流ある川辺にて幡をたてて祈るべし鏡の
形作り祈りし殺して祝よりて祈る限りの
日八里人洗ひかざりにて執行しけるにもとえ

やしかゝることも祢りありきさてはこの川に
流しやることの祢りなるよふなるとし又蓑笠
を着る祢してかゝる事しなとしいまと雨ふるさ方
にあるつ川みなこゝらに出るあるは源山の滝のなかに
をとめさり新なにして祢るもにありみ信州に鉄ぶ
の池れをとゞむるしてきた来て田中にて近き祢るみ堂
比叡山よりしてこゝに源山の霊地ありて中にある
蒲生郡に白山宮ありて小室池
あり白田祢あり池のまゝひ石を清
ところに源祢郡に杉池
てはこの祢ところによはしよか
ころ事に作り
にまた源にしい祢にまたまた地
の祢る白山の社にまた
山院をいとありて祢郎
比叡山もより事に修しまた祢てある
なかにこよ源也
此月神事

十五日東嚴山の祢祢祢の祢也あり長谷城を
よりなかる山門同所よりおりなかし十日二日の事より
まつ祢しく十日より祢とさめおりて二つより
祢ハしつ日なる事にて小祢二郎中にある祢
しらずつるの作をはる觀世流祢を日際退
祢觀ねるの流れ祢しとゆみすとし作りにも祢作
ある事しとそ日足りま日来なりそ祢なしまた祢とつとい
まくるの中祢にて祢なるを宮まへ中祢また祢
祢を祢すり
○流鳥が祢はまれにこさりますかゝりまと足ちよ
ありましてこさりますか是ハ日々にまた祢なし
なる流祢杖にこさりますの日祢本あることよりもる
△抛石の祢にて日祢にまてまくされますにもる
祢杖の名の祢祢れてまくされますなりやり中祢
ますてこさりますなし

○こさりますせう
○おもしろき
あされますし
△こゝまもまち
祢石に

やくかざらざる様にありけるとては、なかれ川に
流しやることの様りなきとふなむとしと、又蓑笠
を着飾しかつ笠をさし、ななとしいまだ雨ふるさま
にもなす川にわたらふに出るあるは源山の流れにうかべ
をとめさり新なとして、ひきもはりて信州に流れ
の池れをとる。すし、たちまち来て田にそそぐひきて、みな至
民族よしとなりて、はや源山の麓に到りて浮べる
ものも流しを見りて来て、わかちて、たちかはりたる
とつふ時をわするといふなり。なくし、新潟漆まで紀
国の界がはしまでのたゆ、小千谷の辺白山の社まで
て、日和とらふとて流くるかしむと漂をいのりけるなり
あらる事とぞ作り

此月神事

十五日東蔵王の堂院の文宝なり、長岡城下
よりおもむくもの同じくより節分参く、すぐに中の島まで
まで詣して、おもむき参る、いりてつくり
終りし、その日おもむきて小屋二郎中の家に明宗
しらるゝその日には其観興法隆院日除の
縁起あるの詩も阿しといふなりとし作りこれ即ち
ある年とても是こそ通りいつしか成りしことつとい
まくらへの中禅寺を謀りつるを念じて中禅寺と橋
杉をとすり

○浜島忌みなきれのこさりすけたりけると是よりも
成りまして、こさりすまでの是八日より上りのかたし
ことに浜橋杉にこさりすまでの法楽のまつりまつる
△杉谷の川法のつりすまして、わざされすまでする
楢杉の名の名残あれてのちそれすまつりの中旬
ますてこさりすまなし

行くとトくへ

○すみ延名と申てふせておきまする是ハ若州にもあや今まて
遣せはまする こゝハ皮にて御仕立被なされませぬか今は紙に
しつらへまする若州の何にても御頼申て清まてこさり
ませしか何も見えもし世上へ楊枝か名のみもこさりまする
るゝ楊枝抄の柳のかへりませぬ如何さらへ御見ゆさ
れませぬか さて世上に楊枝か名も こさりまする
の御の方にこさりまするいかにも楊枝楊柳の寸法もませ
め御の御の方にさしてませぬ御の御の方の楊枝の御の名にされ
ませぬか御の方にこさりまして楊枝の御の御の寸法は
よるの御の方の楊の木の楊枝や楊枝の御の御寸法の
かゝる御の方の御の方のやさしき御を遣わせ
しそれの御の方の御の方の御の方にまて 御遣ハこさり
ませぬ御の方をこさりまする 御の方のこさりまして こさりませぬ
楊枝の御の方のませんして こさりまする
りの御もし楊枝と申ハ今もて今の御の出来御入

さて
とゝや上方にて楊枝の出来候さうしやうしに
こさりまするゆゑは楊枝のこと寸法寸表しても
こさりませぬか何か色〻の事をの本まてこき
りまする。いかにも楊枝のこと寸法も表しおりこさ
さりまするかてらし候てこさりませぬ楊枝楊
枝の寸法をもやせは四寸まてに御座候寸五分男
まて女子ま寸の寸。やしろの楊枝ましまてさして小こ
さりまする口四寸まてハ口を御座候をおもまを御座候
すまする上御の楊枝楊枝をおもまを四寸まて守
るらし十二寸五分落を表まて二寸四寸まて八寸五分のとし
花とか申しに表しましてこさりますれは
是ハ御の家もこさりますの方ハ御もとの方にされませぬ
○御の方のこさりまする寸法表しあの世界へとし
てこさりまするかしもし楊枝の様は何にかて
御さて候ましてこさりまする。されハ手を御こさりまする

一子孔雀[illegible]馬寄の守神にござります[illegible]月の十四日
を以て[illegible]されまする則それを祭りしましても
[illegible]にござります
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
ぬ
十二[illegible]より十四日まで[illegible]の[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

七月

七日星を祭りの事

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

付たり
盆供還りの事
典辰六日の宵よりおはし盆棚一飾りして町
二十日すぎ盆と盆過ぬといふ士家にはかゝる事例十二十三日に
墓所を掃ふそのさま石碑并前に草花をそなへ
よろづくさぐさ出しそなへ明き挑灯をともしめてし燈籠
くりそな麺太角菜高くならしかゝる碑前并花あし
さらにそのもと花さき盆花所かざりの年高盆やうにそなへ
事話と同じかゝる家にて行事例の碑前にかゝ
同じさ様くすこうり送り火をとなへさ十三日夕送り火をたく
事ならの例ねそに夜は盆の後麺目を同し
くらす盆年後はかなけす事て礼絶すまても碑前
とらへ盆にとし田舎法のとの目くりやう盆
の持例当を限るかわりとてよふし槻絶盆年を
の夜目当し事とは申て飾れせぬとめ行り田舎の八
十六日夜四つの時まで是を送り火とて墓のまへに川
松明灯す燈籠などとして行事しくは過年家の例
云伝へ節のうちにて松明ならひ八十年前の
是にて燈籠の例多くて事分かりて送り川
送りにて別してお盆花地の松を燈の送りを
て家しまはゆ行おゐしかりなる松と別して
限る家とかくて飾りくらさすの子人とは送り火を焼き
まへ川限りなるとさはみ槻のあるに盆ありけるを
さ油して灯りしうちは立て盆ならは世話をと
いとまれらしき雑にとて面すすらりすて此盆花
供物を世の人ならて川ありこと流され十六日夕方
ごろ盆をもれ云盆かして出りなしふる送り火
焼てゐしめ流し川送りて中さまをなし多くせ
て別をかなしむさまいとあはれしかも盆のかくやなし

いと珍らかなりし

盆踊の事

城下の町々にも昔しは行はれしの事ともこゝ近在には行はれ
十五日より十七日の夜まで伊勢おどりと唱
ることはかなし　如此けさやさしこまや嘉永頃より
ろうハ多く　ちやせんの例にて似せ踊りとしてあり
近き頃より盆踊　僧法踊とまて手拍子番樽
狩衣なとえうえうき　扮は猿の面袖なとをね
鉄を着て扱は来手踊踊躍雀踊み男女形を作り鮮
くゆふりてうたうをはかりくなふは新保町の旅ら
なうを回り踊へをはしきるるつさまへ外
異にせむはなれしいふ異しとだれ
いきらしきまの事

刺鯖を常に長寿を祝ふ　長　是は白飯を盛の上
に並べて供物に仏し供物にて祖霊を祝ふこと
のは十四日祝の三文は祝ふことのは十五日
に鯛（鯛）刺して添にして祝ふ
けり

施餓鬼まゐりて祭の事　七代

は月十五日より〇月のなかさま寺にて施餓鬼（イハナシ）
の旅をたて小幡（紙幡）の仏前し流
洪沢川をたて祭をたて祓祓し流
なしなり僧侶にてりては施餓鬼
施餓鬼を流し（ナガ）みなかふなり
流れ（まいて）回り瀬を流しなりとのみは
かなしれはかなし作り
けり神まつり祭事

国立国会図書館　タイトル『諸国風俗問状答』　請求記号 857-131
ガラス使用

小木に

杉里にも風祭とて二百十日前幾日の社にまうでて
神楽流布使し順手を祈る事侍り祈深く
器とりてしけりいひとりしるも訴あるは餘り
より七夕まで瀧祭とて吉き事ありける四郷申きて
速秋津日命速秋津姫命豊玉姫命稲田彦
命以上より二の代に一船しつかり留むる鼓に
町中をはやしはりくいたは捕なりとして一番
二番とまとひを先て後まで松家々の前に並ぶ
此後り物を飾りあるり古新侍中湖侍新湖
侍といふ字一字しるしたるし下の流布をきまりけ
神馬を迎て六日の夜とまうらは留め置き支度を
て神くをいさむなまりて後りねをきんとて
人群集していとまさりくし子供ふ綺麗に
書くる額を先て紡むるなる土前にて北

とする詠みの積て七夕の夜濃まねる出てて流
す事なる御作の歌を書き川縁に出し
其の川あたりにて水をくみ汲けて硯を洗ふ加き
きのはし
とかして硯を洗ふ人たりて家々の流る浪て
町を通り御城内は援鉢を加て扉風を立て色
鑑りけるなくて神輿の通るところ上川かくて
惡魔の祓しるる綴手一番とたてる一番しるる
をとり吉に添ふ清めを家々の祓し悪魔を
て祓ひよせふ取のうるとこりしるるとかり
神楽とて厳かなる形なる数体を立てて下る鷹
帽子の白丁着たるもの一人ひつこ一つづつの添り取りより
おのりて稲田姫ささ古抜うり四郷の群を並右
まゐて稲田彦の四郷の四流ちる中よりして評

国立国会図書館　タイトル『諸国風俗問状答』　請求記号 857-131
ガラス使用

と郷にありける行けるをもちて中にも太川以や
出したるによりてたれをも加へさせ太加を
とらせて一人五十貫を与へて二百両八郎の
郡にて八幡宮のさかしるしの八人にてもちてあれ
太刀佐がありける錦棒もちたる一人弥吾の前は
まさ川にて右衛門忠国して弥吾を供させて
語よりあらはの卯月廿日鷹狩にまいりて伝へ近きさ
連てまかり又御座船にてやかた遊りかけしたる
船さきには大きなる許に流し行けるおしたて旗
のありけるに大なる毛の羽毛の旗家来太刀を
太刀にあたる絵を佐賀てもくしてしにある鉾の縁なる
打ちあり合て船に旗をとりけるに
弥吾のよそへ自威のきかせけるは小旗威とあり

またまさつて又吾きてからと植根のすそに陰ふ草
秋になりてのちの色なき以川と軍ありけり亀の根に
まかり節第あけてその年の冬に溢て此の里の氏
ご氏にて来れる座主栄やかにて盛しけれ思ふに歎を打
つけて京名を二る給し蔭にも住まる弟を兵紀にさせ
あまさにして紀をすりしと兄をその代と益なる給も
ことてゐ弥吾といふ歎ありけり双佐藤ゐるといふは
秋田にすけへし佐藤なりて秋官居よりうかひあらし
ゐにあまりし八幡宮なる所にとかくしてもてなせず
是なる語なへとましきこえる事にや太佐や大佐や漢阿
の兄弟御之尾太夫佐藤へとしもかなかりしおよそ
細かにそこなるまへ指をかけしや船棒やすその
早尾の名にして綱を被に花や散らん
此かたの船くゝる陸川崎こさく立てとしあたりてをとさ

高砂芦刈ろかくり松ぞ縫ひかの子ぞ縫ひ
杏の形縫
振おろしとてしもけれどもしは婚礼前の娘子
も振袖広袖にて二布ゝ縫りころもを着る
松前唄あり
国みつる佐州四過る佐渡四十九里佐渡
ゑゆて踊り柏子とりてふたふ縫ふ衣装や数
しんやヤレシャイ月あかしにノサイ松もはるかへて無事も去りけると
ませをゆまりとて四年の中に松小舟船乗すゐ
は名の山崖越ゆ和名は宮まの代を旅ゆくる
ヤレシャイ松とけくへて無事も踊るとやり回ゆりし
此節とて以きるゝしゝ旅の沖の波
浪打の波ゝな浮かるさの浦りゆんはるかへ

そよりしぬけ佐渡の山吹きて色し添りはるかさの
帰りいろまかりヤレシャイ月かサイノサイ松もはるかへて
さをし節ゐるはやりさ替しともゝ婦人
言ひて二番三番と繰りし居る縁まて来て家々
の作りあゐ傘浮き浅く町々にてのに流れ場り甚盛
ん飛るの代るとさまし出あゐりを添ずーて加盛ま
て三番こちりの節の縫まてろまて七八里よ
十二三丁まてのおのこ との花やゝ出られ正とあき
夕けるおこことゝの口長刀持の乱いと佳ふ
見えまてありて名の部ゆざいハまてり十丁迄より
二十丁迄にては夜のゝ参り縁をまし と大く
やゝ書縁焼篝の〜〜の〜飛
ゆかこてあかやうさ楼閣やーのことの[illegible]又[illegible]

新田町にも手を出して仕立て上下諸町流し
きぬ々き小鍛冶なとしつらへなともし交はかりもあ
りくと若き人々の打交りてむかひに出て行
まつりける事に田楽燈籠なとをてまたは湊祭
七夕流し(張)なとの早合なとにふれしの名の書しるると称て
家々にて灯籠を出しおかしき形ちしてはやし
あつまりて一夜のあふらは町を立ちかはりて日和
山にてかしこ踊より濱遊する湊町に海岸の
見物に群集なりかしこと見るを頭巾国の七の刻
して行列をそろへて行列なりけり中島家を通り出く
出ては夫婦の浦を見ことしして日和山へてさして巡る
名所を山かけの事とも有りさゞ浪のへからといふを見かけ
燈籠桃灯ともしのあまたを見かけをはりを見て濱辺
をめくるやの刻に濱へ参て依浦の女より
見物するとなん是やこの湊社(杜)鄭にいはひつ逸

けるかんとして老若男女こぞりて日和山へのかけ道を
やめくへたて人のたちくらもとあたまえなりて午すは
名残あるとおりくさまのも限りさきて前の刻たくする
る刻(衛)なして御遊に出まかる燈籠も桃灯も日和
山よりこちらととりて明日まてたのもしく行列をたて
かへり侍らぬ
廿日なかはより八月中までの夜祭俵年〆の例なれ
諸式を作り物燈籠お(撲)あつまり縫なし枝岸へ
送り候ふん
廿日を始て同の是とさく流すなりかなし

八月

八朔のこと
備前飯為て節差しなりにて仕候ともの家居に

田の色見るかりとて餅をつきなりとひのゝ
さとやゑくし近隣の餅くひくし稲をは
あるといひ而しりせり八穂のころは稲の穂
ありくさ定まりぬとは本卯の濁りはりても
はのにいたしとのなるへし

十五夜芋明月十三夜豆名月とて近江の
作物小豆ひ渓ヒ… 稲をぬ
下田を一ト又ひ残 十五夜八古法餅をさ
相撲よりの芋を豆をも十三夜に枝豆を
豆かりも… 花は…
初席と団子… 芋…

のさしへるくまむり
とともあるまようなる
いにしへ古根二番和菓
…のとの初めかりを借すし
…より秋大まかりて根の
いたし雨穀のいからさ保やう
みかしなくしけりみをそれとは名なしかるといふ

又十五夜月形をうけて様々の穂を手にけて大なる
花のいろよめしといふ

彼岸の事

そのやし志なるとかる侍られ

田刈をむる祝として

田刈をむるり席をすけて名あの形を刈稲の穂
とも御を結つけ根のうくさをとりの餅へそなると新
しとれよりたんし小刈るり新穀を祝のうまて
まて穀り飯をさり又に参りおとしの席と添て
祝する村中くまありぬ

ゆふ月 祝する事有り

七月より刈まりけ月半ありて下して祝ふるの祝あり侍

国立国会図書館　　タイトル『諸国風俗問状答』　請求記号 857-131
ガラス使用

田の色見ゆるまで刈りかけるとて候とつきなりし比の
さをとやらん云ふ也まの候へらひく縮をほ
あるといひあへりせり今縮のころは稲の穂
出づるまでありぬされは二百十日の障りなくても
此のこと祝ひしとのることなるべし

月見の事

此月見をも明月ともいふ月のさし入るところにむか
ひて机などを出し枝豆をそなへ又は団子
盛し又は神酒なども供ふ芒萩さし枝豆芋
を栃葡萄葉にやつのとの神ありを供す
此夕社へちまのそへ地より扇丈ほど切りて根の
ついた徳利の口にさしいさながらさ添やう
にかしたけりかをそえはなるもしあるといふ

又此夜月影をうけて糸をぬの縫をなすけて女の年末
筋のいろよしといふ

彼岸の事

そのやし寺に詣るなる侍られ

田刈そむる祝ひ

田刈そむるとき稲をすけてなえの形を作り稲の穂
三把を結つけ根のかたを一つ田の神へ供すると称
しそれより田んしま刈るに新穀にて餅のまそ
まで新稲をさしなぎに参りおさめての庭と添てで
諸寺社へ祭りはまゐりぬ

此月祭事侍らず

七月なかもより此月末まで所々講中の祭事侍

国立国会図書館　タイトル『諸国風俗問状答』　請求記号 857-131
ガラス使用

院の條式あらし十五日より十七日まで城下に見物人山
のごとく群集をなし侍り
此月なとに用ゐいたさる事侍らん

九月

節句取扱之事はいかにや
此日より袷を着九日より綿入を着のことかはり之候
祝ひて侍らん
九日いかゞにや
士家の礼其外事なし 田舎にては上の事を飾風の
若者とし 仲の事を壮男の若者とし 下の事をもて
下の若者とし 祝程ありて 祝ふとて侍り
みなそれぞれしかもよりて よろしかりしを祝ひ仲ある八下

あかりを祝ふと侍り大かた候とつき粟飯を
まぜしるいのさかなにて侍らん
十三夜この事
筆にあらし
豆名月の也
ゑくるんしお月とゞに供物食来大くし十五夜ぼれ
なしさき飯をとりえ其外に供日さしめていしを飾り
其方にて枝豆ん芋くは穂芋あして今に有
此月神送りの事はいかにや
十月は神くおくりの大社に集まるといひて男
女の縁を結ひならはしてかの様にすることは
他に送るの縁にや 神送りを祝ひ物を送
る人もさし男子子持するとのは十月此郷に送
を祝ふ神酒子餅酒肴なと杯けさする

院の儀式(式)ありし十五日より十七日まで城(城)下に近き人は
のこらず参詣致し侍り
此月なにゝ用ゐてかざることなし侍りれ
九月
節句に家々にて何かする事ありや
此日より祝ひを始め九日より節句まで菊のよふかざる迄
祝ひして侍るなれ
九日いかやうの事ありや
士家の礼式ある事なし 田舎にはよき者を馳走の
若者とし仲の者を始め男の若者として
家の若者として 親類報謝ありて 家の者をこそ祝ひあと侍り
祭(理)しくおよそよりて よそかかりを祝ひ仲ある八下

十月りを祝ひと作り大きく家々とつき粟(粟)飯を蒸し
まさしあれのなす事人侍りれ
十三夜の事
後の月見 十三夜月をいふ 供物食(ホ)来大かた十五夜に於る
事しるす 夜も十三夜を此日としめていもと豆
等をそなへて拝みたれ 後の月は 今は貴賤ともして今に侍り
此月神送りの事ありや
十月ゝ神ゝあつまりの大社にはとひあひて男
女の縁をむすびあひて多くの神々に請ふことのは
世の中に遠くの縁をも神送りを祝ひ始め送
られさる時々は侍ることの十月は神祭
を祝ふ神酒なとを酒頒ちて神送りまでに

精進の節用して参る

此月神事侍るや

十月とて神々のましまさぬとて神無月とは申す

こなたかなた神社にまつり事は一向宗御講

者は此月を報恩講として祖師の忌を檀家

へ招きて僧家と同じ法事なし　法華宗の

講中ありしはさしや申されし　御命講は会式なり

これら信者門徒多く集りていはひかしましく

するなり

此月を以てまつらひの祝ひ用事

此月を以て月の十日ゆゑしいふ今年行はれ

十月

亥の子の事

玄猪は礼式にて殿さまにかぎる事　行はれ士

家の外はなし

ゑびす講の事

士商の家々にてかならず祭る又ならひにいふ

親類ちかしきものを招きあひ酒もりて祝

ひ侍りよろこびにも限られ侍らはよしなり

夷の神に御膳を備へまゐらする節と

御酒も添へていはひ門に張出など

此月神返

国立国会図書館　タイトル『諸国風俗問状答』　請求記号 857-131

ガラス使用

犠の花綱して飾る

此月神事停る事

十月とて神のまさぬとて祭月なりは止めて

そのまゝ多く神社にまつり川先に宗像論

ある月ある月とて衣あらため禰宜の礼をも粧家

へ紙に俗家を日待をとし住吉宗の

御手あるハさるや手つゝに新嘗祭なと等わりの

ら御門にて神の事なしまゐりてらかね声し

すてあり

此月をもつてはしめの用事

膝れをもつて用の手始めしいへる侍る

十月

亥の子の事

玄猪の祝ひとて餅くらひかはる事侍ぬれ士

家の外せるあり

恵比寿講の事

亥商の家には祝ふ事ありて文たふひしいふ

親族ちかしきもの相あつまりて祝ひ酒もりて祝

ひ侍りよそよりわしき限りれさ祝よし有り

恵比の御神像を供まゐる飾と

酒の肴くさぐさそなへて門にも飾りたる

此月神迎

神送りの後出雲へ集まりたまふとて所々の宮も留守と
て此月ミそかは何れの社も御かざりもなく参詣
此神の社にまゐる人も有り

此月神迎の事

朔日神迎の神事あり神前に詣て洛中神社社家宗
ニ十夜の為に願ひ諸社に参詣す洛中の寺社にて
三日と称し十五日の日蓮宗御命講を修して
ご九日におかへ又薬師講を一夜に行ふて人
も参詣ある是をそれ行ふ程に四月の頃よりその祈り
て此月六月の社前の事に今も変らずと云ふ
まての薬師と云ふ
此月をとなへるの事

此月毎夜の事はことたちあまつやくしの夜
念仏をもちて諷経をなし年中の報恩を
申すとなる事の御八百の神と所ての作法と称
且又神前の月にて報恩をもちて祈る
てゐまに申ふ事の日に詣る事なれ

十二月

煤はきの事はさる月朔日の事に行ふ
此日より行ひて家の内家中の者まて寺への遣
を遣して年忘の事ありと云ふ事あり
分けての事とも行ふ
分けて其の日は作法にて願をすまし神前の
此月は此月御礼の家内に座の所を払ふ

此日ふるくより其神の御前にて御焼(ホタキ)とてたきやすると
此地にある事はふるくはいつとしもなく照らしれ給ふ
紀のくにより稲荷の宮にて夜ふけて庭にかゝ火をたき座
の御酒をそなへ供物を御前にさゝけ奉る
とりのさかりなるころふなの此夕に出給ひしぬ

廿一大師講の縁の事

いつれの家にもあつきのかゆを煮て仏に供し侍る
この日雪ふれはあとを隠しの雪なりとていひ伝ふる也
は智者大師この日里をめくり給ふ時のみあし
の跡を人にみせしと降る雪なりとてあつかひて足
その深き所に書なとをとむとて祈る十年来き
其のむかしのもとしもて年の初をとむることのかき
叶ふとはいひふらしもせり

此月神事仏事

若宮八幡宮の末社に天神四座の神相殿し其外に
ある事とては二つの事ある事の外に上の御祭を
中旬より下旬まで五日の間神事有月の朔日を目とし
上に古来の例のとほり何かの御神楽を修して里
を除くの神事とあたかも家々に四所
にもそのたへ御座の用に仏陀の前に
蕪菁をかさねて供へあはせ大きなる柚
杉をさしはさみのしもてそれにかけ
てそのうちに仏をあらはし其を桶にも神を祭
しめ神前に此所の剣に梅のさかき
たる形にしてかの長き四尺もはかりてあはせ

鎌をも神として祭り男神女神とて家毎に
門口のくまにまつる造りかけ柳を立て幣をさす
稲の穂をかけしね其年の穂をもちて
神にそなへ稲の穂を付たる竹にて祭る
ことせしいふにまかせてかくして柳にて
のきしまつりに持り法とひ稲の夜神職のとの
所望などとりて文をも取りて其月を定め此日その
所にて遂るまる此神の十月の事なりましまり
十月中の亥の日をかけてはいつもしき神まさ
まつりし侍る事あるは家をもつて事とす
曲尺をもってはかるもうりて役所をしかるべし
此月廿日より廿八日まで浄土真宗にて祖師
の忌日の報恩講を修せり

此月をはしめて此月をさしあるなり
暮れたる様禱言誓文など申ものも多く此月を用ふ
きまりたる事もなし

十二月

餅(搗すへし)つきの餅の事

海辺の殿さまのあたりまきよりしてまゐるとその
此川流れ餅とて小豆餅を川の中にまつり
流川のしもたて始めて川と云ふ餅とも云ふなり

八日事納めの事

芋牛蒡大根豆腐蒟蒻なとを味噌煮にして食す
いとこ煮といふものにて御事汁ともいふは二月八日の事始
の條に記し侍りぬ

縫ひをさめと云ふ事候哉

家中にて物ぬふは十二月より前に仕まひての事にて十三日
家々(ハ)定りたる日も無し去ながら年の内はし候ひ
事にかゝはりたるは此方にて仕候はぬ
縫物まつりごとする候のみに候

星祭る事はさ候はねど此方昔を定めにて
民家には更に行はず候

除夜の事并節分の事

除夜の行事とて星祭る式も候はず家中にて
こよひ奉公人を呼集めて祝ひ候ほかは神社より立の
まつり神酒捧げなどし候て祝ひ候ものもありたり
又は仕候その夜寝ずして夜中まで居て候ゆゑに
市中にて多く夜食などを祝ひて
子をも寝さずしりけるとするめ銭年手房

豆舛なとに盛りて平皿とすなはち神の棚にて経
は老人として家内として神棚し候
年越りにまかり候や
氏神の社へまいりて言提灯の先をかざすことを
あふすり社夜に熱の紙織につき志ある人々
もしあやまりさかしまりて通夜なとて候し
候ふとて

節分に豆まきのうち

当夜は柊(ヒイラギ)の木まさに豆がらに鰯の頭をさし
戸の外かふみつけ燻(モヤ)しておじりいるゝことも
多く白いし窓のあるかぎりにさして
いかくしとりやせをとしてしもて
くはばらくはばら

とあるの張り二尺して上に竹をさすそそて一足かりを挿き
て是を住まし藁一把又是て此の方よりま
きてし也ふりてうにまつし鬼もて神の前にのべ
かたるより何かにすれば放夜すきたるなと十二夜
也謂はさり村中の戸を前し正月六日と書
して十二月まてしてりしなにしかしにうえてありてなる
を陣ともくちも白く不りたる後てらとし
又やくる時に爪を嘴をくせ折りとし一年の吉凶
をとふ又此年をとり二夜て初雷の折又初旅
のおとに嘆とあて終りいる丸志と云ふ以無哉
新たる花梯をてくしなる

此月諸事 神事の送風とにや

主まつ神ます引し年の厄払ぬ氏神詣す

の政へおまいりて八ヶ所之神事の送風の事
なへ候らん

此月仏事 仏名会なともにや

仏名会は当国寺院にあるよし之禅宗の寺にて不残つ
への成道会を行ふ此月はしめより寒にて中日
忌(とき)収めとて僧を請して親類の衆を招きて
了事 月見忌始めより初 山里にて檀家終て
に歳月あり明放不係り此地のまつりもおの
一とも一年日つのりて寒行(カンギヤウ)として何り日にて
雑をとらり法文を唱して初代之至なりて寺寺に
新村中の小路へ構ありなまにも正月に
記し無仏寺なき所の神々に毎日千経現
なり終り中に深うしてすを掃ぐ事候

国立国会図書館　タイトル『諸国風俗問状答』 請求記号 857-131
ガラス使用

信ずる者少しと見し程なる人のあるより又ハ
火を発しあやまちなどありし日わりなくならし所部
をとらへつくしみありし此時にて名部界をも家り
或ハ[illegible]足ちぢまり腰屈みおもしろき人の家
思ひ居[illegible]の前へ行りといふおもしろき[illegible]
家に[illegible]の手を掲て参り伴侶を借まるらせし
きたる[illegible]なれども[illegible]の節を
ま[illegible]として[illegible]これを[illegible]は借[illegible]に擬
して借用の家を[illegible]ハ父の名をかたりと
川をはかの名を[illegible]の[illegible]ありて大く
九年[illegible]右に[illegible]の[illegible]流頃[illegible]
川の[illegible]を[illegible]
二三百[illegible]をつかまへて遊すくのかると大勤

初に[illegible]といふ
法衣今に伝ふる稲荷詣事
[illegible]
[illegible]
[illegible]
稲荷あり

月待日待の様
日待とは正月五月九月十二月とあり月待とて辛亥の夜を[illegible]
庚申待とは日乾をかけ[illegible]を信し[illegible]
信し夜の[illegible]を待川甲子[illegible]
[illegible]の夜[illegible]
[illegible]
[illegible]

婦人の[illegible]
五ヶ月目に稲荷の帯[illegible]の帯を締る穂

婆ゝにかゝはけさの宝をまゐるとて待らん
産前作法めでたしやしるし事ともいふや
臨月にあたりては帯をとりむすびつけて産所の
方にむかひては湯浴にむかひてよみかへりて十三日を
ここそ産屋を明るとてまゐるとて一七日より
まゐるとき是に出生のをかけふるは夜泣
薬をとり作法ありてより十二日に産髪
をおのの祝ひをのこりとぞもとる橋の(?)の
ことの名づけやうにまゐるありくして一七夜ま
ゐるとつけのまゝを祝ひけるさそ日ことにかし方
のうちをまゐるとりて七夜めに平常祝ふ作り
ある家のうちにそれにはお乳をまゐらせ始め産婦
のなかふめやうに祝ふことにまゐるさうかもちひとかみ
をとくむかへりてみやすもちにも赤小豆(アヅキ)をまゐ
はまゐりて作るまつの祝法あるとてかく是を

以上の路にて気けさの出生せる法なるものをおかしの出生
かゝるれは胎毒よりりてちゝやまひをいとゝう
善らひて毒粉(胎に)よりて言ひさるる作法なし
抱きの節にゝうめかへしましてあひてすとぞいふや
出せる橋のに露るゝ画く紙それにかく(入)日気さ
ぬるをいとゝ深く媒て取む其あるしゆひそ侍
らす
子供の祝ひは三歳五歳七歳のしめなる事あるや
又好りそそがといふ事
三歳男女とも髪置五歳男の袴着七歳男女
とも帯解ありそそきて紐の祝ひをそへしてや
男子の額をおとして袖留めを祝ふめでたき嫁して
後の祝ひ作り元服にかゝやゝの出生は産ぞする
さき作りあるその袖とめるをもるまて祝人
男女元服(被)の式あるや

士家にて小笠原流の書をまもりてするそなへけるのし
あるなどいふもと侍らん京氏は在ところしきたり家によりて
親族おのおの酒のみかはし祝ひの式といふ事
なしことにはなにとなれまでしたまし女子は元服のすゝら誂
こともやうへ侍らん近く歯を染るをも元服といひ眉を
おとすをもとつみ子を輩かに侍らんきこへれ
年々誕生日の祝ひいかゞ
毎年々家にて侍らん二三歳の誕生は親族ちかき臨席
親類なりとも親族ちかき贈なとし侍るも
ありて田舎にては幼児のよろこびて祝ひせらるゝよ
り算にてはなほ年々の祝ひの儀をおこなふ事もありくそれ
おりめたる酒樽等を遣しちかきところへくばりかく
まづさしその子の名を記したる川にながし
縁組のおりすめの祝ひも家中里方親類などのあつまり
ありと申侍るあるいや

縁組の所事家中に婚礼の日取とくさだめ侍りて
はかねてより嫁娶のことのよしは侍らん婚家の家にて
縁のまゝきゝはなりぬしは媒人の事かならんまで取扱
よりたがひのきゝ定りしところ婚家の家に荷物とられ在
よりて結納を贈るなどいひて送り侍りて祝ひの儀
のならひとし侍り此事まではなかなかのきの
言葉なりとも結納を交しかの吉日を定めし取り定
め茶のまゝさかなとりて来ならぬに二度結納をいはふ
めでたきはそれぞれのやうにかくさしいはひ侍り
婚礼の所事中婿殿盃あまりのかはせなどいふる
もいかや
婚礼の式がましき侍られ婿殿とはいふも在郷お
ありかたき候ことなるしいひはりてまうしさまとも
まりもしいしさへまうしてやるしや

国立国会図書館　タイトル『諸国風俗問状答』 請求記号 857-131
ガラス使用

高の家ハ与親姪人を婦の家の婦女を伴ひ行て
男女をもしめ祝ひ三々九度して一家の親戚に対面いわし
めのにまつとさまなせまてしく祝ひて婿を例とし
侍り田舎ニハ遠方遠近ありて有し婿出りとて婿よりめと
伴て親類なりと出る祝儀とも一重の果物をありけるな
として祝ひの折ふしに親族の名称りと称へ侍り
元日吉日祝年入婿入果にはなしや
元日の祝年乃て祝ふに引男乃を祝ひ侍り
吉日といふ事見けて侍りし田舎にては元日中儀
捨て祝ふにより侍りあるより侍り是元服の
儀とも押祝ともいふみちにいかなるを礼とは定る
事なかるまことなるさまも其儀一かさね持つ祝しき
家々又ちかくさに祝ると有りくはしく侍り

葬礼の事

士家の礼なと其家にて宗々高の高きは都て古式とき

△喪と唱へて跡を追慕者めして秋せしめ忌明けても秋を慎む者家の口

もはらし土葬といひてまたありの事なれは何れ浄土真宗
は三所火葬することなりて土葬いたすは少くさまさまて有り
元禄のころよりすこし土葬をはかりて有りて今に至り布施
を施ありせて有りなるすこし元禄年の法ちかき僧侶の
めくさくるを好むとは見え棺を蓋なとのはかなくやのまく
せすまた禅寺の山まで送葬のとき総泥をたきすゑ
るにより葬てはけしく法してそのもを絶と存ても泣る
こともなくはかりて喪家の男女泣ことのくしとすまこと
あまりて喪の法はさまいふなとよひ乃ひ侍り
七々日の法事は百か例出即ち祥なる所あれ供養ありや
七々日の法事のなか次の月の命日を忌明日とて供
養し其月の法より百か日といふものなり

一周忌三年忌の儀

三年忌は迚して三年の事はなり三年の事と称して遠忌
せまものなり

国立国会図書館　タイトル『諸国風俗問状答』　請求記号 857-131
ガラス使用

虔いてんの事
昔より十年ほとに始まりたる例になりハふれ六千一を
布斗かくりとて前ふ八千八ハ其の前として餅を搗(フクデ)手にし
よう事の字を取りて書て親しきその手搗る四民家の者
人々家の前のをり升(トカキ)搗とて家を搗りて入るふ入
を取りまで声を音了升搗おきりなく割り餅にて
へてとくる者ともも家を上は粉(クダ)てあこともをくるふ
取り搗る丸千して取りとは始りより当宅の施し衣
わせしけけと結ひ付りたらし家々は御とより二十年
を取りて下て搗き前ある丸て搗るを根きて流まて
おろを搗宅きえぶさえて夜とちくりとくる前し夜限て
二十年いそくめ人々を先にたてて玄府に流しあり
たるとその船にのせて流す此社にまして御有りて御
流をりえめもはりつ抵あくれ
平衡人々家に棚上の事

棚上の事正月御を勤行しの方国めの根了川さ流大
きし去上の絵をよりく下より川せきたる行るもせへ作られ
男をよて棚上の供えの勢りのをとり流しまる奴にむちを
なる事はり出防のまして御ひありといひ流ふ
ろし流しの事
祈
弦なる事なし家出業をを若くて記しときとのを始るま
ふ是をを取ってうかるといふ
鳩風をさる流しあれの事
風をさくる流しかひら流られ鳩を松ふまりに杉えの
とかし鉦太鼓打ち鳴らしまきしり造りと国る
まで唱へく田の中を行きさ正方来まて田と搗る事ほり
る施餓鬼の幡を田の中に立てしはちを流くるとと
いふ
疫病除のこり

国立国会図書館　タイトル『諸国風俗問状答』　請求記号 857-131
ガラス使用

門に伴神の霊符(フダ)をおしみかり語絶の的けるはよ
んよく鮑のかや馬の骨などをかしこきお続頭殿
部除として門に付てのなどしもまわしこともる俗信
もあるし
旅立の年俗ありきもなきもいや
神しきに立出しは年寄までもまで持ちて
出立とかりに川(カハ)なりてそこを越なとは掃るす
かへるすますき旅立せし日より汐もくるとせる
にあるをいふ立つるあしたは前の日門出の
祝しけこりとめて家に帰り帰る日何とるく
出行しもとより年明けりて祝ふ事ことと胡椒をを
それするにくるといふみること
茶振廻風俗ありしといふの年
茶とはかしんといいやうてくとより持き後を出する
何りにあとよりあかねまるでに八わりくことそれも茶

まよけとしてふこれらや茶好は清水の定見に
や風俗好るすひいなしまた風俗としてめでとは
出立と祝ふして日々に好るままに年寄りめでや候う
んかつらじ
諸郡の祠官祢宜社(匠)家といふて通例ことが絶といふ
職いや
万日(マンチ)といふことの件り寡婦(ヤモメオンナ)など毎年くることの事卯
の卯職出仕かしは法ひらくことを道をける年と
みなび(え)作り職業ある卯の卯社にて滝立宣せ
もいきやしのまつりで年此四季の集節の卯
説を語るに佐節に卯の川と世頃年としていろし
頃あるすをよしなりかんなきの祝までありや
志り侍らん
田楽田楽諸家の古風俗来ればことが俗家の諺(謡)曲成や

田楽幸若等の謡曲作者あれは諏方さの附神事舞
の外舞の舞楽なとにも其神職のことから
さし作り神事ともに限らるる年まや其作儀
今猶其とり花歌の古風の儀作来く
其とり萩や浄るし其さもてより其作りも絶え
他にころまてもや能太夫の作りしら今は
たゝ其ものにての古風の謡をのせ入作られ
多念録多作もあれともいふ諸方すこう猿楽作り院内傳
みこの能是ある職ふのそのひや
さか是ある作と今なるものこそ橋あのをわて猿り
うたみ年ありてわざとも是と今有る子
様かきとらの職ふあり是とも禄多あ記ある
其外道ふる禄多の神前し子乙わびの風
事能作ることのほり是と禄多の能ありことか

是ある職の作られ
太郎いつあの能
大神の近江其ともやの作られいは河あと百年
前まそあしよし是また其はなし

風俗問状答終

文化十三子年正月
公儀奥御右筆屋代太郎様より関東
書を以諸国之風俗御問合有之候七ヶ条
当町新潟之御尋ニ付御答之趣扁
之義御役所西潟下ヶ旨無急度御年寄中ヘ
御頼有之候 御沙汰 御家中之風俗を
加之書加へ同年八月下旬中清書言指出ス

秋山多門太

857
131

国立国会図書館　タイトル『諸国風俗問状答』 請求記号 857-131
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『諸国風俗問状答』 請求記号 857-131
ガラス使用